

学びと社会参加を通じた人財育成の方策について ～「学びの種」を拾う～

(第11期青森県生涯学習審議会報告)

平成26年 8 月

第11期青森県生涯学習審議会

はじめに

近年、我が国は急激な高齢化と人口減少社会の到来に直面し、地方への影響は深刻さの度合いを増すばかりです。本県においても若者、特に女性の減少が顕著になるとの予想が大きく報道されるなど、危機意識は高まっています。

地域社会における世代構成の変化、特に子どもの数の減少は、学校の統廃合等、そして付随するPTAや子ども会の活動、さらに学校を核とした地域コミュニティそのものがなくなるなど、影響は多岐にわたります。

我々は先の東日本大震災において、いかに地域コミュニティが大事であるかを思い知らされました。普段から地域のことについて一緒に活動する仲間がいたからこそ、あの災害においてもお互いを心配し、声を掛け合い、助け合って非常事態を乗り越えることができたのではないのでしょうか。

第11期青森県生涯学習審議会は、地域コミュニティの基盤となる社会参加活動と学びとの関係に着目し、県民の皆様がいかにして学びの種を捨てていただくか、どうしたら学びの場に参加していただけるか議論して参りました。また、学びを生かし、地域において社会参加活動を実践していただく、あるいは、地域の盛り上がりはどうしたら創出できるのかについて、活動の実践者への聞き取り調査を実施し、その結果を踏まえて議論を重ねてきました。

本報告では、県民の皆様に向けた提案、行政機関へ向けた提言を掲載しています。

青森県の生涯学習振興発展に寄与できれば幸いです。

平成26年8月

第11期青森県生涯学習審議会

会長 太田博之

目次

第1章 審議テーマの設定

- 1 設定理由 1
- 2 聞き取り調査の実施 1

第2章 これからの青森県における生涯学習の在り方（コンセプト）

- 1 これからの生涯学習の考え方 2
 - (1) 生涯学習の効果は、心が豊かになることである
 - (2) 生涯学習を通して、日本人（県民）に求められる生き方、在り方を啓発する
 - (3) 学びとともに、人と人とをつなぐことを意識した生涯学習が必要である
 - (4) 小さな地域活動が県全体に広がる可能性がある
- 2 生涯学び続けることの意味 3
 - (1) 県民と行政が一体となって生涯学習社会の構築を
 - (2) やりたいこと・なりたい自分は生涯学習の先にあります
 - (3) 生涯学習のゴールは一つではありません
 - (4) 生涯学習は、人生を通じ「知る・交流する・実践する」手段です
 - (5) 生涯学習の入り口は「公民館」にあります

第3章 学びと社会参加活動のつながり

- 1 学びの種を拾うために 4
 - (1) 学びへの気付き
 - (2) 第一歩を踏み出すために
- 2 何のために学ぶのか 4
- 3 地域活動への誘い 5
 - (1) 学びから始まる仲間づくり
 - (2) 男性の社会参加に向けて
 - (3) 組織を継続するために

第4章 学びと社会参加を通じた人財の育成

- 1 「学びの種」を拾ってもらうために 7
 - (1) 学びへの啓発
 - (2) 学びや活動に関する効果的な情報提供
 - (3) 個別の広報の工夫
- 2 学習機会を充実させるために 8
 - (1) 学びの場の設定の工夫
 - (2) 感動体験による内容充実
 - (3) 地域住民の参画
 - (4) 多様な機関との連携
- 3 学びと社会参加を通じた人財育成に向けて 9
 - (1) 人財の育成
 - (2) 民間との連携
 - (3) 人財の活用
- 4 関係職員のスキルアップのために 10
 - (1) 職員の研修
 - (2) 教員の研修

巻末資料

- (1) 聞き取り調査結果の概要 11
- (2) 審議経過 25
- (3) 第11期青森県生涯学習審議会委員名簿 26
- (4) これまでの答申、提言等一覧 27

第1章 審議テーマの設定

1 設定理由

我が国は本格的な人口減少社会に突入し、本県におけるその傾向は特に顕著です。地域社会においては高齢化が進み、世代構成の変化や、地域社会の中核施設である公民館や学校の消失、後継者不足による産業構造の変化など、地域コミュニティの基盤が大きく揺らいでいます。また、働き方、暮らし方など、生活スタイルも多様化しています。

このことから、社会の大きな変化に対応した「人財」の育成と生涯学習を基盤とした社会参加活動の推進が求められています。

社会参加活動に関する学習の機会は、多くの行政機関や関係団体により提供されています(平成24年度県事業274、市町村事業1,086〔平成25年度「青森県の社会教育行政」より〕)。また、平成25年度「社会教育行政の方針と重点」(解説)では、「学習成果を生かした社会参加活動が活発に行なわれるような仕組みの構築に努める」としています。

そこで、第11期青森県生涯学習審議会では、学びを社会参加活動に生かす方策と県民が学びのきっかけをつかむ方策を示すため、今期の審議テーマを「学びと社会参加を通じた人財育成の方策について～『学びの種』を拾う～」としました。

※人財：本県では、人は青森県にとって「財(たから)」であるという基本的な考え方から、「人材」を「人財」と表しています。

2 聞き取り調査の実施

学習の機会が十分にありながら、その機会が利用されず、社会参加活動が活発に行われないうのは、社会参加活動の前提として学習活動があると捉えられており、学習活動そのものが敬遠されているのではないかと考えられます。また、その結果として社会参加活動が進まないという側面もあるのではないかと考えられます。そこで、実際に社会参加活動をされ、学習と活動が結びついていると思われる県内の様々な団体等に聞き取り調査を実施し、その結果をもとに具体的な方策を探ることとしました。

○調査内容

- ア 現在の活動の内容及び活動を始めることになったきっかけ
- イ これまでどんな学びの機会があったか
- ウ 今後どのような学びの機会があればよいと思うか
- エ 人々を学びに向かわせる案はないか
- オ 活動しながらも、さらに学習が必要だと思うか
- カ その他

○調査対象団体

県内13団体・個人

※対象団体一覧及び聞き取り調査結果の概要については、巻末(P.11～)に掲載しています。

第2章 これからの青森県における生涯学習の在り方（コンセプト）

聞き取り調査をする中で、改めて生涯学習の意義やあるべき姿が見えてきました。ここでは、生涯学習の目的や社会における役割を再確認し、今後の本県の生涯学習の在り方について考えてみたいと思います。

1 これからの生涯学習の考え方

(1) 生涯学習の効果は、心が豊かになることである

町の清掃やPTAの集まりなど地域での活動は、生涯学習や社会参加活動とは意識せず参加している方がほとんどではないでしょうか。そして、それらの活動に参加されている方々は、活動を通じて楽しんでいる面もあるのではないかと思います。何らかの活動を通じて地域社会とつながり、心の豊かさを感じることができれば、生涯学習を意識したものでなくても、それは生涯学習の効果の一つと捉えることができます。

(2) 生涯学習を通して、日本人（県民）に求められる生き方、在り方を啓発する

現在の社会情勢を見ると、近年の激しい社会変化や東日本大震災に伴い、人々の価値観や個人の生き方も変化しています。このような中で、大人だけではなく、将来の子どもたちのためにも、経済的に豊かであった時の発想とは異なる、時代の変化に対応した価値観や意識の持ち方について、生涯学習を通じて啓発していく必要があります。

(3) 学びとともに、人と人をつなぐことを意識した生涯学習が必要である

生涯学習の裾野は大変広く、初歩的で垣根が低く、楽しい講座がたくさんあります。一方で、急激に進む人口減少により地域のコミュニティ機能が衰退しつつある中、今後は、人と人をつなぐことを意識した取組が求められます。人は減っても、人と人とのつながりを強めることはできます。小さなコミュニティでも、まずは人と人をつなげ、孤立する人をなくする取組を意識した学習機会を増やす必要があります。

(4) 小さな地域活動が県全体に広がる可能性がある

本県の町内会加入率や自主防災組織の設置率は全国平均を大きく下回っています。また、東日本大震災を経験した私たちは、地域の人とのつながりが大切であるということを実感しました。

人口減少や健康づくり等、行政だけでは対応が難しい課題の解決に向けて、民力の結集と県民一人一人の民力の底上げが必要です。

その方策として、小さな地域活動の実践を足掛かりとし、次第に県全体の取組として広げていくことが考えられます。

2 生涯学び続けることの意味

(1) 県民と行政が一体となって生涯学習社会の構築を

豊かな生涯学習社会を構築し、県民が健康長寿で安全・安心な暮らしを実現するためには、呼びかけやキャンペーンはもちろんのこと、県民一人一人の民力を結集する必要があります。

今後は、県民と行政が生涯学習の理念と方向性を共有し、一体となって生涯学習社会を構築していくことが求められます。

(2) やりたいこと・なりたい自分は生涯学習の先にあります

何かやってみたいことがある、自分は将来こうなりたい、という人生の目標が具体的に見えている場合、学ぶ目的は明確です。しかし、個々の目標は人生の様々な場面で生まれ、その都度変化するものであり、学ぶ目的もまたそのことに応じて変化していきます。このため、学びは、学校教育だけでカバーできるものではありません。社会に出て仕事をする中で生まれる目標や、同じ志を持つ人との出会いが、「なりたい自分」を具体化し、学び合ったり高め合ったりすることにもつながっていきます。

(3) 生涯学習のゴールは一つではありません

社会参加活動の前提として学習活動をしなければならないとの認識は変えていく必要があるかもしれません。学ぶ目的（ゴール）は多様であり、人によって異なるのは当然です。資格取得によりスキルアップし、収入につなげようとする目的を持つ人もいれば、発表や表現によって人に何かを伝えたいという目的を持つ人、また、ボランティア活動など人の役に立ちたいという目的を持つ人など、様々な学びの目的が考えられます。

また、一方で明確な目的を持たず、学ぶこと自体に楽しさや喜びを感じたり、学びによって社会とつながっていると実感を得たりするような学び方もあり、それもまた生涯学習であるといえます。

(4) 生涯学習は、人生を通じ「知る・交流する・実践する」手段です

学びは人生をより深いものにします。また、学びの場での多くの人との出会いがその人の世界を広げていきます。多くの人との出会いから刺激を得て、自らの実践につなげ、そしてその経験を周囲に伝えて共感し、知識や喜びを共有することが生涯学習の醍醐味であると言えます。このように「知る・交流する・実践する」生涯学習は、自分らしい生き方を見つけ、人生を豊かなものにするものと言えるのではないのでしょうか。

(5) 生涯学習の入り口は「公民館」にあります

地域住民の方々が集い、講座や研修会で学び、さらに学びを通じて人とつながり、共に地域活動に取り組んでいく「集まり、学び、つながる」場。それが公民館の持つ本来の機能です。子どもからお年寄りまで誰でも利用できる公民館は、いわば生涯学習の入り口ということが出来ます。

近くの公民館に足を運ぶことにより、自分の思いが学びや活動につながっていくかもしれません。

第3章 学びと社会参加活動のつながり

第2章で述べたとおり、学びのきっかけは身の周りにたくさんあります。しかし、普段から意識しないと、情報は飛び込んできませんし、社会参加の活動へとつながることはありません。そこで、ここでは、学びのきっかけを逃さず、地域活動へつなげて行くためのポイントについて述べたいと思います。

1 学びの種を拾うために

(1) 学びへの気づき

お住まいの地域での清掃活動や、地域のお祭りの準備なども生涯学習の一端と言えます。現在取り組んでいる活動の意味を少し掘り下げ、考えて行動してみることが学びにつながります。

青森県高等学校PTA連合会への聞き取り調査(→P.18)では、保護者と教職員と一緒に様々な活動をするPTA活動も生涯学習であるというお話がありました。そこには人との出会いがあり、刺激をもらい、協力して活動し、その成果を地域に発信して共有していくプロセスがあります。

自分がやりたいこと、興味のあることを普段から意識し、高めておくことによって、自然に興味ある情報が目に留まるようになります。それが、学びへの気づきとなります。

(2) 第一歩を踏み出すために

気づきを得たら、次はどう踏み出すかです。県や市町村が実施する講座やセミナー等に申し込んで参加するという方法もありますが、もっと自分の身近な場所で、身近な人と何かを共有してみようとする意識を持ってみてはいかがでしょうか。前述のように、普段から楽しいことや興味があることを見つけ、その思いに自ら歩み寄って参加してみようという意識を高めておくことで、地域で行われている行事やイベントへ足が向きやすくなります。そこには、同じ価値観を持った方々が集まっているはずで、そこからさらに公民館祭りや生涯学習フェアのようなイベントに参加してみることも考えられます。まずは見る側として参加してみて、そこで出会った学びに共感できるものがあれば、自ら行動を起こすきっかけになるのではないのでしょうか。

また、青森山田高等学校男子新体操部BLUEへの聞き取り調査(→P.17)では、プロフェッショナルや専門家に出会うことの大切さについてお話しいただきました。本物に出会い、本物の感動を味わうことによって自分の目指す姿が明確になったり、共感を得ることによって第一歩を踏み出す原動力が生まれることもあります。

2 何のために学ぶのか

それぞれの学びの目的は多様です。

こうなりたい、こうしたいといった目標を自らが設定し、その実現のために学んだり、活動に生かすために資格を取得したりする学びは、手段としての学びと言えます。

また、人と出会うことを目的とする学びもあります。自分がしたいと思っていることをすでに実践されている方と会って話をしたり、活動を見たりすることによって刺激を受けることができ、自らの実践意欲が湧くというケースがあり、出会いを目的とする学びと言えます。

さらに、学びの後に目的ができる場合もあります。学びに参加した結果、楽しさや生きがい、充実感を強く感じることによって、その感動を周囲にも広めたいと思うようになり、新たな人とのつながりを生みだすことにもつながります。

このように、目的がはっきりしているものがある一方で、そうではない学びのスタイルも多数存在します。

学ぶことによって周囲とつながっているという感覚を持ちたい、あるいは社会とつながってほしいとの思いから学びに参加したり資格取得の勉強をしてみたりといったケースがあります。また、学んでいるという行動自体に満足感や幸福感を感じて学びを継続する方もいるでしょう。

いずれにしても、生涯学習のハードルは決して高いものではなく、自由な考え方、多様な目的のために学びを始めることができるものです。

3 地域活動への誘い

(1) 学びから始まる仲間づくり

地域での活動は、最も参加しやすい生涯学習の一つです。地域住民が暮らしやすい地域をつくるために住民同士で話し合い、主体的に行動することはコミュニティづくりの第一歩であり、とても重要なことです。また、地域課題を意識しなくても、住民が同じ趣味や興味を持つ人と集まって活動を始め、その活動が活発になれば、共感する仲間が増えて、イベントを立ち上げたり、発表をする機会を設けたりするなど、やがては地域づくり、まちづくりへと発展することもあります。

(2) 男性の社会参加に向けて

かねてから、男性の社会参加活動の割合が低いとの指摘があります。女性は仲間をつくって、連れだってどこかへ出かけたり、一緒に何かに取り組んだりすることが比較的容易にできているように見えますが、男性は一步を踏み出すまで腰が重いとの意見も見られます。本県の場合、男性の退職後の家庭へのひきこもりも課題となっています。一般的に男性は在職中には退職後の生活設計を考える余裕がなく、いざ退職を迎えた時には何をして過ごしたらいいのかわからずに、ただ漫然と生活してしまうことが多いからではないでしょうか。

このことを解消するためには、退職を迎える数年前からでも、退職後に取り組んでみたい活動を少しずつ考えておき、自分の中に「学びの種」を蒔いて、育てておくことが必要です。

(3) 組織を継続するために

規模の大きい小さいは別にして、地域には様々な活動グループや組織が存在します。人と人とのつながりを形成し、集団として活動を続けるためには、代表になる人、活動をリードしていく人が不可欠であり、そのような立場になる人は、組織をマネジメントする力が必要です。

須恵器の里かっちゃんの会の聞き取り調査(→P.19)から、新たな参加者を募集する時や活動の継続を悩んでいる参加者への対応の際、リーダーの「一緒になって取り組んでいこう」という誘いの言葉が有効であることがわかりました。また、リーダーがすべての決定権を持つのではなく、参加者による合意形成や役割分担により特定の人に負担が集中しないよう配慮することなどが重要であることを伺いました。つまり、リーダーが「ファシリテーター※」としての資質を備えることが大きな意味を持ちます。また、組織を継続するためには、次のリーダー育成や参加者が楽しいと思うような演出や組織の在り方を考える必要もあります。

※ファシリテーター

グループ学習などにおいて、参加者の学びや活動を促進するため支援する能力や、会議など意見を出し合う場において、参加者の意見を引き出し、相互理解や合意形成を促進する能力を備えた人のこと。

第4章 学びと社会参加を通じた人財の育成

第4章は、「学びと社会参加を通じた人財の育成」という観点から、行政機関の取組について提言します。

1 「学びの種」を拾ってもらうために

(1) 学びへの啓発

多くの人々に積極的に学びに向かっていただくための方策として3点挙げます。

1つ目は、多くの人が集まる場を活用し、啓発活動を行うことです。具体的には学校、企業、活動団体の集まる場、医療・福祉施設におけるイベントやワークショップ等の実施が考えられます。このような場で、関係する講座の様子や事業の内容を、パネルや映像を使った展示や出前講座、ブースの出展などによって紹介します。

2つ目は、学びの目的とともに、学んだ後の生かし方を提示することです。この講座を受講すればこのような知識が得られる、という目的だけではなく、その知識を生かす方向として考えられること、あるいはステップアップした、より上級の学びの機会を提示することで、次の学びや活動に向かうきっかけを与えることができます。

3つ目は、子どもたちの教育に関わる教員等の研修の充実です。幼少期から将来の学びの種になる小さな種を蒔いておくことが、将来大人になってから拾う種を見つけやすいのではないのでしょうか。そのためには、子どもたちと接することの多い教員や職員自身が、生涯学習についての正しい認識を持ち、変化の激しい時代を生きていくための指針を示すことが重要だと考えます。

(2) 学びや活動に関する効果的な情報提供

講座やセミナーなどの学びの機会は、県や市町村などの行政が実施するものだけでも多数行われており、効果的な広報や情報提供に努めることによって、さらに多くの参加者を得られる可能性があります。

具体的には、これらの学習機会に関する情報を一元的に管理し、検索が容易なシステムを構築して提供できれば、たとえ予定が合わず参加できない講座があったとしても、似たような講座が近い日程で予定されていないか探すことができるようになり、学ぼうとする人の気持ちをつなぎとめることになります。

また、講師や指導者となる方々を登録する「人財バンク」を整備することによって、地域で行う講座などに講師を招きやすくなるのではないのでしょうか。ユニークな取組をしている団体や個人を一覧で提供できれば、指導者の招へいや協力依頼などもしやすくなり、より近い場所で受講できるようになると思われます。なお、最近は「人財」情報だけでなく、その人財がどのようなプログラムを展開できるかが分かる「プログラム・バンク」のような形式のものも見られます。

県では、「あおもり県民カレッジ」のような、総合的な学習支援に係る取組を展開していますが、これらを更に積極的に広報し、子どもから大人まで広く学習に関わる機会が準備されていることを周知する必要があります。

つがる市歴史散歩の会への聞き取り調査(→P.14)では、学びへの関心が高い方々は、比較的遠隔地で開かれる講座等にも出かけて参加している実態があることを紹介していただきました。可能な限り多くの県民の目に触れるよう、興味関心を引く学習内容の掲載、楽しく活動している状況、目を引くデザインなど、情報提供のあり方を研究する必要があります。

(3) 個別の広報の工夫

個々の広報のあり方や実施の方法について、人を引き付けるようなタイトルの工夫は極めて大事です。この講座に参加すれば自分が変わるかもしれないといった魅力あるコピーで人々を引きつけることは、広報において重要な要素です。他のチラシなどに埋もれてしまうことのないよう、少しでも目に留まりやすくするためには、印象的なタイトルやデザインなどを採用し、興味関心を引くようにしなければなりません。

記事の内容については、プログラムのねらい・流れを分かりやすく見せるとともに、実際にその講座に参加した方々の感想を掲載するなどの工夫を加えることによって、興味を高められるのではないのでしょうか。

口コミもまた重要な広報手段となり得ます。地域で活動している方から直接誘われることで、参加への意識や意欲が高まります。

また、受講申し込みに関しては、手続きの簡素化や締切後の受付け等、柔軟な対応が必要です。

2 学習機会を充実させるために

(1) 学びの場の設定の工夫

学びの場という表現には、具体的な場所や会場を指す「場」と、学びの形態や方法を指す「場」の2つの意味があります。

まず、具体的な場所を指す「場」に関しては、会議室や研修室以外にも、例えば街中のカフェや喫茶店を使うなど、参加者同士が気兼ねなくおしゃべりができるような会場を設定したり、机等の配置などにも工夫を凝らして堅苦しくない雰囲気をつくり出す必要があります。また、会場がバリアフリーに対応しているかどうかを確認するなど配慮が求められます。

次に、学びの形態や方法を指す「場」に関しては、一方的に講師の話聞くだけの講義スタイルだけではなく、自由な意見交換や小グループでの話し合い、お互いのグループ同士のまとめを発表したりするなど、進め方の工夫が必要です。

小さな子どもがいて参加しにくい方のためには、子どもを一時的に預かる施設や部屋を準備することを考えるとともに、子どもがいるからこそ参加の幅が広がるというような「場」の提供が必要です。ミュージシャン 坂本サトル氏の聞き取り調査(→P.16)で話されたことは、「子どもたちが参加して楽しむことができ、夢を持てるような講座を開くことも考える必要もある」ということでした。

お互いを高め合うため、同じ考えを持った人がいるという気づきを引き出すような仕掛けも必要です。そのことで、グループ同士やサークル同士の交流の機会が生まれ、広

域でのネットワークが形成されていきます。また、知識の獲得が資格取得などにつながれば、達成感や成就感を得ることもできます。

NHK文化センター弘前支社への聞き取り調査(→P.23)では、発表や表現の場を設定することにより、学びによる達成感や成就感が共有できるため、自らの目標達成と、他の人への学びのきっかけづくりの両方の効果を期待することができると思っています。

更に、学びの場の設定では、例えば退職期を迎えた男性向け、子育てに忙しい母親向け講座など対象別に特化した内容や、平日学ぶ時間が取りにくい人向けに夜間や休日に講座を設定するなど時間的な配慮をして、「学びの種」を拾いやすくする必要があります。

(2) 感動体験による内容充実

学びを生かした地域活動の実践者に直接会って話を聞いたり、実践の場を見たりするなど、体験により得るものは大きいものがあります。

事例に触れることによって、なりたいと思う目標を明確化することができ、活動の活性化につながります。プロや成功者からの直接指導を受けるチャンスに巡り合うことができれば、それは、大きな感動を得ることにもなるでしょう。

学習プログラムの内容を充実させるためには、ぜひ、様々な体験を伴うものにしたいものです。

(3) 地域住民の参画

生涯学習の根底には、地域の課題を地域住民が中心となって解決していくため、学びの成果を生かした活動を行うという考えがあります。地域の課題を解決するためには、それに合った学びの機会が必要です。有意義な講座やセミナーを開くためには、企画を立てる段階から地域の住民に参画していただき、そのニーズを捉え、講座内容を構築する必要があります。

(4) 多様な機関との連携

企業内研修は、社員を対象として実施されるものですが、研修メニューの中には一般の方々にとっても役立つ内容のものがあったり、普段では一般の方々がなかなか接することができないような著名な識者を招いていたりすることもあります。このような企業内研修の一部でも、一般の方々が参加できるような仕組みを構築できれば、官民の連携や、企業と地域とのよい関係構築にもつながることが期待できます。

3 学びと社会参加を通じた人財育成に向けて

(1) 人財の育成

人財育成を意図したプログラムには、活動のリーダーを務める人向けのプログラムと、コーディネーター向けのプログラムがあります。

活動のリーダーを務める人向けには、これからリーダーを務める方を養成するための講座と、すでにリーダーの立場にある人のスキルアップを図るための講座があります。

また、各地域には人と人、人と地域、人と学びを結びつけるようなコーディネーターが必要です。コーディネーターとして、効果的な事業企画や情報発信を実施できる人財の育成については、行政が積極的に取り組む必要があります。

(2) 民間との連携

前述の「2(4)多様な機関との連携」(P.9)で、企業内研修の一部を一般開放する仕組みの構築を提案しましたが、行政が実施する講座等を企業の研修プログラムとして位置付け、企業の人財育成のために利用できるような連携によって、官民両方が持つ資源の相互利用を図ることも考えられます。

(3) 人財の活用

今後は、学びによって得た知識を活用していくことがますます重要となります。様々な講座等の修了者や、シニア世代の豊富な経験や専門的な知識、技術等を生かすために、講座やセミナー等の講師や指導者として関わっていただくなど、「人財バンク」のような仕組みを整備し、育成した人財を積極的、効果的に活用することが望めます。

4 関係職員のスキルアップのために

(1) 職員の研修

行政が実施する生涯学習に関連した各種講座等は、相当数が提供されています。一方で、県民は、自らのニーズに合った学びの機会がどう提供されているかわかりづらいと感じていることも考えられます。結果として学びの機会を逸しているのであれば、これを改善していく必要があります。

方策の一つとして、県及び市町村の社会教育主事等関係職員が、住民のニーズと、提供されている講座とを結び付けて紹介をしたり、学びたい意欲はあるが、どのような講座に参加したらよいか選びあぐねている方へのアドバイスをしたりできるよう、行政と住民をつなぐコーディネーターとしてのスキルを向上させる研修等を充実する必要があります。

また、地域の課題解決や地域特有のニーズに対応するため、特に市町村の社会教育主事が、新たな企画をつくり出すことができるような研修を充実させることが必要です。

(2) 教員の研修

教員の生涯学習に関する認識を高めるような研修の機会を充実する必要があります。次代を担う子どもたちに、「生涯にわたって学んでいく力」、「学ぼうとする力」を身に付けさせていくためには、最も子どもたちと身近で接する教員自身が生涯学習の理念を理解し実践することが重要です。

巻末資料

(1) 聞き取り調査結果の概要

学びの成果を社会参加活動に生かし、活動から学ぶ意欲を得ている方々に対し、委員が訪問してインタビュー方式による調査を行いましたので、参考として概要を紹介します。

調査先一覧

	調査先	調査対応者	調査した委員	調査日
1	社会福祉法人青森県社会福祉協議会	地域福祉課長代理 葛西裕美 氏	太田 博之	H25/8/27
2	NPO法人いろいろなはぐくみの会	代表 井ノ上洋一 氏	浮木 隆	H25/7/29
3	つがる市歴史散歩の会	会長 神元勝 氏	工藤 秀美	H25/8/20
4	tecoLLC (テコ・エルエルシー)	代表 立木祥一郎 氏	斉藤 雅美	H25/9/ 2
5	坂本サトル 氏 (ミュージシャン)	同左	境 香織	H25/8/ 2
6	青森山田高等学校男子新体操部 [BLUE]	監督 荒川栄 氏	境 香織	H25/8/ 9
7	青森県高等学校PTA連合会	会長 相川順子 氏	佐藤江里子	H25/9/19
8	須恵器の里かっച്ചあの会	代表 斉藤久子 氏	澁谷 尚子	H25/7/22
9	八戸ポータルミュージアムはっち	館長 風張知子 氏	田頭 順子 中上千壽子	H25/8/ 6
10	下北アグリサポーターズクラブ	参加者代表 河野紹視 氏	原 英輔	H25/8/21
11	八戸クリニック街かどミュージアム	館長 小倉秀彦 氏、小倉学 氏	小笠原彩子	H25/9/ 4
12	NHK文化センター弘前支社	支社長 山本和之 氏	三上 雅通	H25/9/17
13	つるた街プロジェクト	代表 岡詩子 氏	山上 恵子	H25/7/26

※肩書きは調査当時のもの。

<p>ア</p>	<p>学びの種の拾いやすさについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一般向けの講座案内等の際に、障害者が参加しやすくなるような環境（バリアフリー等）をしているか？要項等には記載があるか？例えば車イス対応の会場であるとか手話通訳がつくことが、どこまで伝わっているのか分からない。 →障害者に伝わってなければ、たとえ記載のない案内が来たとしても、あきらめて行かないのではないか？
<p>イ</p>	<p>社会参加活動実践者の学びの経過について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・障害を持つ方が地域の活動リーダーになっている例はないか？ →スポーツ面では、車イスバスケットなどにいると思う。近年の傾向として、グループ化や集団化はしにくくなっていると思う。でも、健常者のグループの中に車イスの人がいるような場面は以前に比べて多くなったと思う。特に後天性障害の場合は、それ以前からつながりのあった友人などのグループと、障害を負った後もそのまま関係が続きやすいと思う。
<p>ウ</p>	<p>学習機会を充実させるためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・資格試験などには障害者も来る。実はパッと見わからない障害者（精神的なものやペースメーカー利用者等）外から見えづらい障害者も多い。 ・障害者への講座等の開催案内配布等の案内状況はどうなっているのか？HPやツイッター等は活用していないのか？健常者と障害者の間に情報伝達の差（量、頻度等）はないか？ →各種団体を通じて案内を配付することが多い。ただしこの場合は「障害者向け」の案内であり、特殊と言えばそうなるかも。そもそも障害者の参加者自体は多くはない。（対人口比） 車イスの方は、トイレの問題がクリアになれば、意外とどこにでも行きやすい。ちょっと広いだけでOKである。むしろ、周りの健常者が階段昇降のお手伝いを積極的にしてくれるなどの環境（人々の基本的な考え方）づくりが必要だと思う。 ・参加しやすい場所や環境については伝わっているか不明である。今ある講座等に、障害を持つ方が参加するには、何かひっかかっていると思われるのだが？ →①チラシやポスターに「バリアフリー」や「障害者対応」の文言を入れると、一つ解決策になるのではないか。 ②文書やチラシにいつも決まった「ロゴ」や「マーク」を入れれば一目でわかるのではないか。 ③バスや車での送迎も考えられるか？ ・障害者を持つ親の団体に「手をつなぐ育成会」がある。が、構成者はやはり高齢化している。発展として会の活動（例えば料理教室）から大きくなって、レストランを出したりもしている。 ・団体や会に入っていれば情報が届きやすい。しかし、入っていなければ情報は手に入りづらい。
<p>エ</p>	<p>学習意欲を喚起するためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループや団体の構成者の高齢化は、障害の有無にかかわらず同じようにある。 ・会社にアプローチして、会社が取り組む生涯学習グループがあってもいいのでは？ →企業内の障害者に対する研修（たとえば手話講座とか）を拡大して地域住民に開放する手もあると思う。企業のCSRにもつながるのではないか。障害者雇用の理解を深める研修会をやって2～3社しか来ないのが現状である。 ・学習の後のフォローアップ、あの人変わったよねとかの評価や、次へのステップアップを促したりしているか？他者を誘ったりしているか？指導側に回っているか？ →①研修会修了者の集まりはあるものの、どちらかというと市町村が主体。 ②実態としてはやっている人とそうでない人の差が大きい。でも、得た知識を次の何かに活かしたいと思っている人はたくさんいると思う。
<p>オ</p>	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実は何もしなくても（こちらから手をかけなくても）障害者は能動的でいろいろ参加しているのではないかと我々が知らないだけかもしれない。現代は情報も多いし、カルチャースクールなどもたくさんあって、意外と行政が知らないだけかもしれない。あるいは行政の考えるプログラムは魅力的でないのかも。情報が多いいいことで「選ぶ主体だけど、やる（参加する）対象ではない」のかもしれない。 ・行政から独立して、たとえばNPO化するなど、今後はそうやって行くべきなのだとも思う。福祉の世界も情報が多くなってきて、選べるけどやらないという風になってしまっていると思う。

<p>ア</p>	<p>学びの種の拾いやすさについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学びの機会を得るためには、一人ひとりが内発的な気持ちを持たなければならないと思う。
<p>イ</p>	<p>社会参加活動実践者の学びの経過について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京で勤めていた際、隣にフリースクールがあって手伝っていた。手伝いをしようと思ったのは、たまたま図書館で不登校に関する本と出会ったことで、とてもエキサイティングな読書体験だった。それから不登校に関する本を読みあさって、勤めの傍ら手伝いに行くようになった。40代で会社を辞め、出身地である地元で同様のことをやりたいと考えた。 ・平成17年に地元に戻り活動を開始したが、立ち上げの際は何のネットワークも持っていなかった。八戸市内の世帯に8万部チラシを自ら配って歩いた。「子どもの居場所を作ります」がチラシのキャッチコピー。結果、数人から手伝いたいとの反応があり、新聞にも取り上げてもらった。 ・平成18年から、売市での活動がスタート。北海道から社会福祉関係者を講師として呼び、不登校に対応する内容のセミナーをやったら、会場に入りきれないぐらい人が集まった。不登校への支援は、本人や保護者よりも、地域の人たちが理解を深めることが重要であることを認識した。（平成21年まで活動） ・来ている人たちの「自己管理方式」での運営を提案したが、うまくいかなかった。主宰者が抜けると、なかなか活動を継ぐ人が現れない。サポートする人の後継者の課題などもあった。 ・「若者サポートステーション」との連携も考えたが、井ノ上氏の考える「まずは家から出てこいよ」というコンセプトとは違うため、関わらなかった。県環境生活部青少年男女共同参画課が行う、社会参加型「子どもの居場所づくり」事業を「こどもはっち」で行っている。卒業後に活動してくれるようなつながりを作って、続けられるような作戦を考えなければならないと思っている。
<p>ウ</p>	<p>学習機会を充実させるためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最初は堅苦しくなく、「〇〇カフェ」みたいなやり方がいいと思う。「△△セミナー」とかは堅苦しい。なんとなくしゃべれる場がいいのではないかと。 “時間がない” 等で来ない人を無理やり連れて来るようなことはしない。学びと遊びの境目が難しいと思う。来ている人が「手伝いますか？」となれば（利用から参加へ）いいと思う。参加一発目の「達成感」や「感動」を、主宰者としてどう演出するかが難しいし、成否を左右すると思う。県や市から事業を受けているだけではだめで、こっちから打って出る、「こんなことやりたい」という動きをしていきたい。
<p>エ</p>	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・最近、他のNPOや団体を見て思うことを伺ったところ、その団体の基盤について、最近増加している新しいNPOは行政などから補助金や委託金を受けて運営（介護保険事業者など）しており、それ自体は悪いことではないが、資金の大半が補助金等による運営方法はいかかなものかと思う。自己資金や寄付金、集まった人の出資金で活動しているところは少ないし、自立しているところはほとんどない。法人格を持つと補助金や車をもらいやすくなるが、やっぱり違うと思うということであった。

3 つがる市歴史散歩の会

<p>ア 学びの種の拾いやすさについて</p> <ul style="list-style-type: none">・楽しい活動は長続きする＝明確な目標(成果)と方法(種を育てる)を示す。・同好者への呼びかけ(興味・関心のある事業＝種に人は足を向ける)・継続活動(種を育てる) <p>→目標達成への活動(種の育て方メニュー)と会員相互の情報(品種)提供。</p> <ul style="list-style-type: none">・会員が持ち寄る情報には、皆が関心を寄せる(種の品定め)。 <p>→会及び会員個々の成果の展示品評会。</p>
<p>イ 社会参加活動実践者の学びの経過について</p> <ul style="list-style-type: none">・興味・関心を同じくする人々がいる。 <p>→グループの立ち上げ→目標に向かう方法(種)を共有できる事業メニューの選択と実践</p> <p>→会員どうしが情報(種)収集して持ち寄る。(種を育てる)活動を選定する。</p> <ul style="list-style-type: none">・持ち寄った情報を基に、現地での学習活動→探究心の高揚。 <p>→活動の報告、成就感・達成感が長期活動を支えている。</p>
<p>ウ 学習機会を充実させるためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none">・身近な学習環境(施設・専門職員・資料・機材・展示発表等施設)の整備 <p>→専門職員(種を育てる指導員)の配置。</p> <p>→郷土史や遺跡に触れる等々、体験活動の拡充(養分)で学習意欲の喚起と参加者の拡大をねらう</p>
<p>エ 学習意欲を喚起するためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none">・(種が育った)成果品の展示発表と保存、発信(＝勧誘活動)をする。・関心のある、参加したいと思う集いには、遠くでも自ら進んで出かける。 <p>→楽しく学習活動している状況の報告や今後の実施計画を広く広報する。</p>
<p>オ その他</p> <ul style="list-style-type: none">・情報収集の仕方を知る。自宅で、公共施設で。 自分が育てたい種は何なのか?様々な種(情報)を自分で探し、育てる面白さを知る。 例 「情報化時代を活用する」(インターネットの利用) 以前は集団学習→今は個人学習の時代→グループ学習に発展→地域活動へ・情報収集の仕方(種の拾い方を指導) <p>→インターネットを知らない方へ利用方法を届ける。</p> <p>→一人学習の普及から同好会へ発展、地域活動へと期待したい。</p> <p>高齢者、主婦、施設入所者…インターネットを知らない人、持たない人も結構いるのではないか?</p>

ア	<p>学びの種の拾いやすさについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・常に好奇心を失わないこと。何事も面白いこと。つまらないことであっても、見方を変えれば面白いかもしれない。それを見つけることが大事。
イ	<p>社会参加活動実践者の学びの経過について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東京都出身、東北大学を卒業後、映画に関係する仕事を希望し、当時はなかなか無かったが、川崎市民ミュージアムが立ちあがることになり、職員となった。立ち上げまでは市の職員として、始まってからは財団法人の職員（映画の学芸員）として仕事をするようになった。映像作品を制作できる部屋も機材も揃っていたが、セキュリティエリアの中にあっただため、閉館と同時に退出しなければならなかった。若い制作者がよく来てくれ、賞を取るほどの作品を作るようにまでになったが、建物の構造によって、制作時間が制限されるのは残念だった。是非建物の設計からたずさわりたいかった。 ・そういったことを考えていた時、青森で新しく美術館を作る計画があり、学芸員を募集しているという話を、当時の世田谷美術館の館長から聞いた。県立の美術館なので、ちゃんとしたものを作らなければならないのだが、「自由な設計」でやって良いと言われ、青森へ赴任した。その時点で青森に永住する気持ちは無く、立ち上げに関わり2年くらい経ったら他県の美術館で仕事をしようと思っていた。しかし2年を待たず、開館直前に異動の辞令が出た。異動先は弘前の工業試験場で、2年半お世話になった。ここでは商品開発や食品開発をやった。畑違いの分野であったが、現代美術について「どうしてこれがすごい作品なのか」を説明する文言を考えていた経験を工業試験場に持ち込んで商品説明を考えたら、売り上げが伸びるようになった。工業試験場で商品のブランディングの仕事をし、面白いと思った。生産から販売までのプロセスを学ぶことができた。 ・tecoLLCの初仕事は、新幹線七戸十和田駅開業の時、PRグッズの制作をしたことで、それから、はっちのコンサルの依頼があり、これは県の研究員として監修、設計に携わった。ただ、県の肩書があると、なにかとやりにくく、独立して（tecoLLCとして）やることにした。はっち開館までの仕事だった。2012年、IMFの国際会議における公式ギフト品に「3つのおきあがり小法師」が採用された。
ウ	<p>学習機会を充実させるためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ソフトウェア的な事業や市民を巻き込んで何かをしようとする場合は、公的機関はあまり深くまで関わらない方がいいと思う。奈良美智さんの展覧会は、行政が深く関与すること無く市民ボランティアの集まりから始まり、結果大成功を納めた。与えられる学習機会ではなく、自ら望む、取組みたい物を探すことこそ、充実した学習機会となり得るのではないか。
エ	<p>学習意欲を喚起するためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・豊かな地域資源を持つ青森県だからこそ出来ることがある。そういった部分にどんどん目を向け、これまでに無いブランディングをしていくことが地域力アップにつながる。 ・見方を変えれば、今自身が置かれた場所で出来ることがある。
オ	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・2012年に開催された、IMF・世界銀行年次総会の公式記念品、「3つのおきあがり小法師」から、南部鉄器のおきあがり小法師「てつっこ」がソロデビューし、近日発売になる。その愛らしい風貌と健気な動作は、見る者を引きつけて止まない。これらの商品が生まれた背景には、東北から、日本、そして世界経済がふたたび起き上がって回復するよというメッセージが託されている。今自身が出来ることを模索する、イコール学びの種を拾う方策の一つではないだろうか。

5 坂本サトル氏（ミュージシャン） <http://www.sakamotosatoru.com/>

<p>ア</p>	<p>社会参加活動実践者の学びの経過について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どものころから歌うことが好きで、歌うことで両親に褒められたことがきっかけとなる。 ・RABちびっこのど自慢に出場、習う音楽へは興味はなく、歌＝自分と思い込んでいた。 ・東北大学時代仙台のオーディションで優勝するも、全国大会では2年連続2位。なぜ2位止まりなのかを悩み、一番大切なのはオリジナリティであることに気づく。そしてついに優勝へ。デビューのきっかけを掴む。（ジガーズサンというバンドで1992年デビュー） ・歌を作る＝形のないものを世に送り出すということ。 ・音楽に就職する＝自分の好きなことを仕事にする。 ・ソロデビュー曲が書けないで悩む日々、誰かのためではなく、自身を励ますために書いた曲「天使達の歌」で、1999年ソロとしてデビュー。 ・ソロ活動とともに路上ライブを繰り返し、遠のいていた故郷（南部町）を意識するようになる。 ・自分を作った場所＝青森。青森で生まれた人間として、自分の人生を肯定する歌を作り届ける。 ・現在、一番身近な青森のアーティストとして活動中。
<p>イ</p>	<p>学習機会を充実させるためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地元でのライブの実施。学生対象、子育ての親対象、青森の郷土芸能や郷土の楽器とのコラボ、青森にはゆかりのないアーティストでも幅広い人脈で、音楽と青森を結びつける活動。 ・第二の故郷宮城県、震災がきっかけとなり、音楽での被災地支援を。応援歌制作、宮城の会への参加、被災地テーマソングの作成、宮城発ガールズユニットのプロデュースなどを手掛ける。 ・人を巻き込み、人を繋ぐことを音楽を通して行う。 ・ネットをつかったレコーディングの実態を紹介するなど、音楽システムのハード面からのアプローチの機会を提供したい。（ネット環境の急激な向上と変化に対応できる講師陣を配置しないと、講師は務まらない）
<p>ウ</p>	<p>学習意欲を喚起するためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子育て中のママを外に連れ出す要因としての子どもが居ても行けるライブを目指す。 ・歌の中に、やる気や、勇気、共感を見つけてもらえたら・・・
<p>エ</p>	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「青森が好き」という人を増やすためにも、今後の青森県に活力を与える子ども達が、ワクワクする場所を提供し続けることが大切。 ・そのための一つとして、アイドルを目指す子どものスクールの充実、音楽システムを教えるスクールなど、青森に居ながらにして中央を目指せる環境を整えることが必要なのではないかと。（現に、アイドルになりたいという相談も受けているとのこと） ・そして、坂本サトルの大きな夢は、（県人口2040年には90万人まで減少と予測されている）青森県の人口を増やすということ。

6 青森山田高等学校男子新体操部[B L U E] <http://www.blue-aomori.com/>

ア	<p>社会参加活動実践者の学びの経過について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・荒川先生は中学の部活で男子新体操へ。恵まれない家庭環境の中、いつも一人だった自分が集団で成し遂げることの苦労と達成感を得る。 →新体操が自分を救ってくれたことに気づく。 ・様々な学校を経て母校である青森山田に赴任して12年、男子新体操の底辺を上げるべくKIDSの取り組み（BLUE tokyo KIDS）新体操を職業にダンスパフォーマンス集団（BLUE）を立ち上げる。 ・KIDSの目指すところを明確にするために、見えるスター（青森山田男子新体操部・青森大学新体操部）のスキルを下げずグレードの高い作品を作り続ける努力。 ・現役新体操部の更なる先、教員の道だけではない新体操のプロとして生きる道を作る→BLUE（浜崎あゆみバックダンサー、シルクドソレイユメンバー、舞台役者など） ・世界で活躍したOB達が自身の立場で学んだことを持ち帰り青森に終結。青森からエンターテイメントを発信 →舞台BLUE（今年1月に第一回実施、来年も控えている） ・新体操を通じた青森からのエンターテイメントの発信でビジネスに発展。 ・青森への集客、青森への注目、青森県の活性化に…
イ	<p>学習機会を充実させるためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・演技会の実施。…特に、すぐには演技を観にこられない遠方の施設、学校などに招聘してもらい、新体操を感じてもらう。 ・KIDS層へのアピール。…昔は身近な遊びの中で自然に培った体力や身体能力を、BLUE tokyo KIDSを通して学び、自身の得意分野を見つけていくこと（自分を知ること）からスタート。
ウ	<p>学習意欲を喚起するためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自身の得意分野を見つける→足が速い、ジャンプ力がある、体が柔らかい、勇気があるなど、遊びながら自分の得意を発見し納得して次に向かえるようなきっかけづくり。 （例：足が速い→陸上・サッカー・野球 体が柔らかい→体操 ジャンプ力→バスケ） ・自分に自信が持てるような得意分野を見つけ出し、自発的に得意分野を伸ばしたいと思える環境に。
エ	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・KIDS教育が重要であり、人生の方向を決めるのは中学3年から大学1年の5年間だと思う。 ・青森にはスポーツに向かわせる団体が少ない気がする。 ・スポーツクラブを運営し続けるには中学・高校との連携が必要で、指導者は、自身の得意分野で飯を食うシステムを考える必要がある。 ・KIDSには、目指したい目標とする、強く活躍する人を数多く見せることが大切。

ア	<p>学びの種の拾いやすさについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・まずはどんな形からでもいいのでPTA活動に参加してみてもらおう。初めは大変と思うかもしれないが、いろいろな人と触れ合うことで楽しさも芽生えてくる。 ・学校行事やPTA行事に参加していくうちに自分にもできる事や、もっとこんな事に参加してみたいと思う事が増えてくる。
イ	<p>社会参加活動実践者の学びの経過について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の子どもは一人だが、児童養護施設の職員をしており、職場で職員が子ども達の親がわりなので、自分の担当として高校のPTAに参加するようになったのがきっかけ。なので、今年で役員13年目になる。県の役員には6年前からで会長職は3年目になる。 ・単P会長を長くやっていたので縁があり県の会長をさせてもらい、いつの間にか全国の会長職についていた。毎日忙しいが、本当にいろいろな経験をさせてもらえて光栄である。 ・全国各地で聞く会員の声、自ら学んだ事を少しでも行政、関係者に伝えていきたい。 ・自分の子どもの時はあまり積極的でなかったPTA活動だったが、自分で参加してみても見えてきた部分がたくさんある。運動会の保護者カレーライス作りはやってみてよかった活動だと思っている。
ウ	<p>学習機会を充実させるためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PTA活動そのものが生涯学習活動であると思う。学校の研修活動や広報活動、校外活動への参加。また、いろんな人たちとおしゃべりして、情報交換をする。それも学習機会だと思う。 ・全国でのPTA大会などでいろんな方のお話を聞くことができる。青森にもぜひ呼んで話をしてもらいたい方を知ることができる。 ・高校になると保護者が学校に来なくなってしまいがちだが、高校の3年間は親にも子どもにも大切な3年間だと思う。
エ	<p>学習意欲を喚起するためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・PTAの活動をされてきた方々は、「もっといろいろしてみればよかった。」という方も多い。PTAが終わるとなかなか会う機会も減り、情報にも疎くなってしまふ。その様な事がおきないように地域になんでも聞いたりできるコーディネーターがいるといいと思う。 ・すでにそのような方がいるのであれば、もっと増やしてもらいたい。 ・地域や町内でも、昨今なかなか民生委員や役員のなり手を探すのに困っている。情報の連携などをして、活動の手助けをし、多くの人にためになる情報を提供できるようにしてほしい。
オ	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で学びたいと思っている人は、自分から出かけていろいろな情報を手にいれている。お金がかかっても忙しくても学習する。個人のこのような部分を引き上げることが重要で、大変なことである。

8 須恵器の里かっちゃんの会 <http://www.applenet.jp/08001102/suekinosato.html>

ア	学びの種の拾いやすさについて
	<ul style="list-style-type: none"> ・ J A 女性部の活動に関わる事で学習の機会を得た。 ・ 父親の影響で学習への意欲・社会参加の意欲があった。 ・ 青年団活動で理解ある配偶者に巡り合えた。
イ	社会参加活動実践者の学びの経過について
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 青年学級への参加→青年団活動→J A 女性部の活動→V i C ウーマンの活動→ヨーロッパの視察→グリーンツーリズムを知る→行動に移す機会を探っていた→平成20年民泊の許可があった。ヨーロッパの視察がその後の活動に大きく影響している。 ・ 民泊の実践の中で更なる広がりが出てきている。
ウ	学習機会を充実させるためのアイデア
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 家族の理解がないと社会参加活動は難しい。 ・ 意外と女性の方が学ぶ機会がある。 ・ 男性も女性も共に学べるものがあればよいと思う。 ・ 男性の学びの機会が少ないために女性の活動に理解がない。
エ	学習意欲を喚起するためのアイデア
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 信頼関係のある人からの地道な声掛けは大事だと思う。 ・ リーダーとなる人の声のかけ方。 ・ 本人次第のところはある。
オ	その他
	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学ぶ意欲と家族の理解との上に学ぶ機会がある。 ・ 実践することで新たに仲間を得たり、周りからの信頼を得る。そうなることで、よりステップアップした立場となり、新たな学びの機会が与えられる。 ・ 学びの種を持つリーダーになり得る人に、よりレベルの高い学びの機会を与えることが周りの人々の視野を広げていく事につながる。 ・ やって見せることで解る人もいるので、実践できる環境づくりをサポートすることも重要だと思う。

9 八戸ポータルミュージアムはっち <http://hacchi.jp>

<p>ア</p>	<p>学びの種の拾いやすさについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域の資源を活かしながら市民と協働して人と人をひきあわせるネットワークを広げて、人と人とながらぎをつなげる。初めはその事業に関心のある人に声をかけ協力を求めつつ次のステップにつなげていくように働きかける。 ・①気軽に立ち寄れる空間づくり②貸し館事業③自主事業 <p>三つの柱から、楽しみながらたくさんの方が参加してもらえる企画を考える。</p>
<p>イ</p>	<p>社会参加活動実践者の学びの経過について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・何の為にこの仕事をするのか自分自身に問いかけ納得して仕事をし、自分なりの意味をみいだす。「私が守らないで誰が？」という思いがあった。そして、自分がやれる事を精一杯やるようにする。 ・女性まちづくり塾を通して、政策決定の場に女性が入っていないとだめだと思い政策を学びながら「母の立場」だけではなく専門分野の意見を主張する女性参画の機会を与えたかった。 ・八戸市民が八戸の良さを知らない人が多いので知ってもらいたい。街の良さを知ることで人生を変えるかもしれない。「はっち」という施設で街を知るきっかけとなる場所でもある。 ・コミュニケーション事業・・・取材→店との交流→信頼関係 いろいろな事業をすることで八戸の魅力を発信する大切さを認識することができる。
<p>ウ</p>	<p>学習機会を充実させるためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外に出る必要性を感じていない若い人たちには、コミュニケーションをとりながら声をかけると参加してくれる傾向がある。 ・借主がやることを持ってくる施設なので、はっちが独自にやるものはほとんどないが自分たちの街の良さを伝える事業をやっている。見た人が自分の街に誇りを持ってほしいと思っている。 ・「はっち流騎馬打球」というプロジェクトからロボコンへつなげる仕掛けをしてやろうということになり1事業ごとに誇りをひとつずつつけていきたいという思いでやっている。 ・また、「街のウワサ」では、その展示を見て「あの店に行ってみようかな？」とか実際に足を運び店主と話が弾んだりしたこともあるようだ。 ・「もよって参道」では、おしゃれ好きもそうだが、コスプレ好きも巻き込んでやったら盛り上がった。街の人(店)にもたくさん参加してもらおうような企画を考えていきたい。
<p>エ</p>	<p>学習意欲を喚起するためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・高齢者の方がおしゃれをしていらして下さり輝く街にしたいという目標を持っている。鷗明大学OBの「はっち」でのボランティアの方は学んだものはどこかで形として表現し、地域に還元したいと思っている。鷗明大学との連携も視野にいれながら活動の場を増やし、年をとればとるほど楽しくなるようなイメージで取り組みたい。 ・生涯学習の最終達成感は、「人に教えること」、「高齢者が輝く生活をしていること」だと思う。
<p>オ</p>	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの質問の中で仕事だとはいえ、風張さんの目的を達成するための強い意志と実行力、行動力、しくみ作りなどの取り組みに感銘した。これからも「はっち」は、多方面において市民力を携えながら大きく躍動していく施設だと実感した。 ・また、若い人たちには特にコミュニケーション能力が重要だと思うので、円滑に人と人との輪を広げていくためにも学校教育の中での指導も大事なのではないかと思った。

10 下北アグリサポーターズクラブ

<http://www.pref.aomori.lg.jp/soshiki/kanmin/sh-nosui/agrisupporter.html>

ア	<p>学びの種の拾いやすさについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今知りたいこと、してみたいことができる〈人々の欲求、要求の把握〉 ・最初の参加体験がハードルを下げ意欲を喚起し次の行動につながっていく。自ら決定できるようにするためにも、最初の体験に踏み出すことが重要〈参加しやすい企画〉
イ	<p>社会参加活動実践者の学びの経過について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「農業のことを知りたい」という実践者の希望にマッチした「農業のことを伝えたい」という企画(アグリサポーターズクラブ)に出会った ・市の広報紙で知り参加申し込みした ・農業者(農業士会)が直接指導する、プロの農業者から直接技術を教わる活動の中で、植える喜び、収穫する喜びを知り、新しいものに挑戦したいとの希望が出てくるようになった。 ・現在、実際に農業を実践するようになった。農家になったということ？ ・人を知る、人脈を広げることに楽しみを感じている。大事なことだと思うし仕事にも人生にもプラスだと思う。 ・多くの手間がかかるなど農業の大変さを体験することによって、作物の大切さを知ったり、価格が適正なものであるという理解につながった。
ウ	<p>学習機会を充実させるためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家庭菜園をやっている方々は、見よう見まねでやっているの、「プロが指導します」「こんな悩みにお答えします」といった告知の仕方がよいのではないか 〈人々がそれぞれ持つ、知識や技術・能力などへの欲求、要求にマッチした内容〉 ・個人でクラブに参加する人はいないようだ 〈個人での参加はハードルが高いため、グループで参加できる、またはグループで参加しやすいアプローチの工夫〉 ・時間的距離(学ぶ場所まで何分かかかるか)も関係がある
エ	<p>学習意欲を喚起するためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「参加する理由」を伝える ・「こうすれば参加できる」を伝える ・地域のオピニオンリーダーを通じた、あるいは発信源とした口コミによる情報伝達が効果的
オ	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・今年の新しい活動は「リアル農業」体験という企画で、実際の農家に入りトマトやキュウリの選定作業、収穫作業や、イチゴ農家の収穫後のツルの撤去作業などを体験させてもらった。農業は大変な作業であり、生産者は生産だけで手一杯の状況であることも実感させてもらった。また、生キャラメル作りやピザ作りなど食品加工の体験は農業の楽しみの面を感じることができた。 ・県民局の事務局中心の活動から、そろそろサポーターズクラブの会員だけで立ち立って事業をやる時期に来ていると思っている。

ア 社会参加活動実践者の学びの経過について

- ・ 学びの機会
 - 地域振興、八戸のイメージアップへ尽力したいという思い
 - 10数年前より博物館構想があった。
- ・ 学びの種
 - 2006年八戸市博物館開催「吉田初三郎と八戸」展より鳥瞰図に感銘を受けコレクションを開始した。
- ・ 学びをどう実践に生かしたのか
 - 現在全国有数の吉田初三郎鳥瞰図のコレクションを誇る。県内問わず全国の博物館に資料貸出実績を有する。
 - コレクションを活用した地域貢献、文化振興事業、企画展実施
 - 博物館運営と中心街活性化への取り組み、創意工夫、教育普及、資料貸出
- ・ 実践者はどんな成功（あるいは失敗）体験を持っているのか
 - 八戸クリニック産婦人科医師としてから、博物館運営に初めて挑戦する。

イ 学習機会を充実させるためのアイデア

- ・ 民間の強み、柔軟さを活かして人が集うことのできる、学ぶことのできる場の提供
- ・ 公共、行政について学ぶことのできる機会
 - 公共、教育、行政の仕組みや特徴、考えについて知る、民間としてどのように公共や行政に働きかければよいのか、連携するためにはどうしたらよいかを知ることのできる機会
 - 民間の強みを知る・掘り下げることのできる機会
 - いいですね、の先である「こうする」というシステムづくり
- ・ 生涯学習・社会教育・解説について
 - 低コストで質の高く内容の充実したもの
 - 一般に理解しやすく興味を持ちやすいもの
 - コンセプトのしっかりしたもの
 - 継続性のあるもの
 - 教養や趣味より世界を広げ、人生を豊かなものにすることが実感できる
 - 交流の機会
 - 子どもと共にいる大人への教育普及、学ぶ場の重要性
 - 子どもの英語塾（グローバル化）
- ・ 場所づくり
 - 人にきてもらう、楽しめる
 - 活動、場を提供するためにはどうしたらよいか
- ・ 人材育成
 - 地域の人材の力を活かす
 - 養成する人を育成する場、場所を増やす
 - 特に団塊の世代を対象に目的、理屈、継続、一貫性のある、参加

ウ その他

- ・ その他（今後の展開目標）
 - 映像を使う。
 - ・ 地域の人と多く携わりたいとの思いがある。
 - ミュージアムを通じ、多くの人がいるいろいろなことに対して興味・知識へとつながり、深めることのできる取り組みをしたい。

<p>ア</p>	<p>学びの種の拾いやすさについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講座にどれだけ人が集まるかは、講師次第のところがある。 ・行政による生涯学習の考え方には疑問を感じることがあり、講座を実施することが仕事の中心ではないと思っている。また、高齢化が背景にあることは想像できるが、何を目指し、何を目的にしているのかわかりにくい。 ・より広く、多くの方々に文化的な環境を提供したい。 ・放送だけではない、文化の広がりのため。 ・カルチャーセンターの開拓はNHKであったと自負している。しかし、現在は他の方が熱心。 ・NHKを含め、民間で「高いお金を払って学ぶ」ことが行政が実施する講座との参加者の意識の決定的な違い。
<p>イ</p>	<p>社会参加活動実践者の学びの経過について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・NHK文化センター弘前支社は昭和63年に開設され、東北でも4番目に早い開設であった。 ・弘前は中央公民館を核として、弘前大学等も公開講座をやったりしている。 ・講座の開設数は多いと思う。開設内容については支社長が全てに目を通し、決定している。 ・講座への参加者は65歳を超えた女性が大半で、決して富裕層が集まっているわけではない。年金をアテにしている方がほとんど。消費増税等で生活が苦しくなれば、真っ先に切られるのは文化活動にけるお金だと思う。
<p>ウ</p>	<p>学習機会を充実させるためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・講座内容は趣味に関する内容と教養に関するものどちらが多いかという質問には、教養に関するものが圧倒的に多いそうである。しかし健康に関することは他の民業(フィットネスクラブ等)に行っている。武道館にもマシンが置いてあり、安い料金で利用できる。 ・教養や文芸に関する講座の講師は、弘前大学の講座とぶつかることが多い。NHKと弘大の講座の差別化を図ることは難しく、これが大きな問題だと思っている。
<p>エ</p>	<p>学習意欲を喚起するためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「受講者は学んだ後、得た知識を生かす自らの行動を起こすか」との質問には、高齢者や女性の受講が多いことから、特にリーダーを養成するようなことは考えていないとの回答であった。 ・「なぜ男性受講者が少ないのか」との質問には、よくわからないものの、歴史モノの講座等は男性が多くなるとの回答であった。 ・「若年層の参加」については、現有の講座内容では、ターゲットとして若年層には声をかけづらく、若い人向けの講座といっても、何をやればいいのかもわからない。 ・「一番評判が良かった講座は」との質問には、迷いなく郷土史との返答。弘前の人には地元が大好きだと強く感じるとのことで、ひろさき検定の影響もあるのだろうとの返答であった。
<p>オ</p>	<p>その他</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行政への提案として、「学びの場」づくりよりも、学んだ人が「発表したり表現したりできる場」を作って提供することが役目ではないだろうか。

<p>ア 学びの種の拾いやすさについて</p> <ul style="list-style-type: none"> ・積極的な学びへのきっかけ →問題意識や理想をもっていること →同じ思いをもっている友人や知人の存在
<p>イ 社会参加活動実践者の学びの経過について</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学びの機会 →複数の友人との語り合い...同じ考えの人がいることの気づき →県で行った地域おこしのセミナーへの参加 →地域の年長知人たちによる助言、情報提供、応援 ・実践...「つるた街プロジェクト」の立ちあげ(2012年10月) ・成功体験...○定員を超える参加者があったコネクトパーティ <ul style="list-style-type: none"> ○尊敬するカリスママーケターの著書への同プロジェクト活動掲載 ○「星に願いを～キャンドルナイト in 津軽富士見湖～」が県社教センターの委託事業に決定
<p>ウ 学習機会を充実させるためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・外的要因を高める方策 →自身の活動と同様のあるいは目指す活動を実践している人物による講演やワークショップの開催 →自身の活動拠点へ先駆者や専門家の招聘、具体的助言の要請 →SNSにより対象者を明確にし、興味のある人に漏れのない広報活動
<p>エ 学習意欲を喚起するためのアイデア</p> <ul style="list-style-type: none"> ・内的要因を高める方策 →自身の活動と同様のあるいは目指す活動を実践している人物との直接的な交流、相談、意見交換、助言 →同志や仲間との継続的な活動、意見交換 →活動に対する地域内外からの公正な評価(特に称讃や感謝、応援)

(2) 審議経過

回・開催年月日	議 題
第 1 回 平成24年10月17日	1 青森県の生涯学習の現状について (1) 「青森県教育振興基本計画」及び「平成24年度社会教育行政の方針と重点」について (2) 「青森県教育委員会キャリア教育の指針〈総論編〉」について 2 審議テーマについて 3 意見交換
第 2 回 平成25年 2 月15日	1 審議テーマについて 2 県関係部局における取組について (1) 青森県の人づくり戦略について (2) 青森県のコミュニティ・ビジネスの現状について (3) ワーク・ライフ・バランス推進事業について 3 意見交換
第 3 回 平成25年 5 月29日	1 学ぶ意欲を高めるための要因について 2 聞き取り調査について (1) 対象者選定 (2) 項目の設定
7 月～ 9 月	聞き取り調査の実施
第 4 回 平成25年10月30日	1 各委員による聞き取り調査の報告 2 報告書の作成について
第 5 回 平成26年 2 月28日	1 各委員の提案について 2 報告書の骨子について
第 6 回 平成26年 6 月27日	1 第11期青森県生涯学習審議会報告（案）について 2 リーフレット（案）について 3 意見交換

(3) 第11期青森県生涯学習審議会委員名簿 (任期：平成24年 8 月21日～平成26年 8 月20日)

区 分	氏 名	所 属 等	備考
学 校 教 育	野呂 徳治	弘前大学教育学部英語教育講座教授	副会長
	横内 清信	青森市立千刈小学校長	
	山上 恵子	青森県立森田養護学校長	
社会教育、 文化・スポーツ	澁谷 尚子	企業組合でるそーれ代表	
	太田 博之	N P O 法人テイクオフみさわ顧問	会長
	中上千壽子	八戸市立白銀公民館相談役	
	三上 雅通	N P O 法人 harappa 理事長	
産 業 ・ 経 済	原 英輔	青森県農業経営士会副会長	
幼児教育・保育、 福祉	浮木 隆	社会福祉法人八戸市社会福祉協議会事務局長	
	田頭 順子	社会福祉法人桔梗の会轟木保育園園長	
P T A	佐藤江里子	青森県P T A 連合会理事	
市町村行政	工藤 秀美	前つがる市教育委員会教育推進監	
報 道	境 香織	ラジオパーソナリティ	
公 募	小笠原彩子	青森プラスデザインプロジェクト代表	
	斉藤 雅美	N P O 法人あおもりN P O サポートセンター副事務局長	

(発行時現在)

(4) これまでの答申、提言等一覧

期	答申、提言等タイトル	日付
第10期	県が実施する生涯学習・社会教育施策に対する意見について(報告)	平成24年8月7日
第9期	学校・家庭・地域が一体となって教育に取り組む社会を構築するための方策について －学校と地域の連携のあり方を中心として－(提言)	平成22年7月20日
第8期	若者のキャリア形成支援の方策について(提言)	平成20年7月25日
第7期	育てよう 伝え合うところ －青少年のコミュニケーション能力の向上にむけて－ (提言)	平成18年7月28日
第6期	キャリアアップによる豊かな人生を築くために －青森県における今後の生涯学習の推進方策について－ (提言)	平成16年6月15日
第5期	青少年の豊かな心をはぐくむ体験活動の充実方策について －学社融合の推進方策について－(提言)	平成13年6月26日
第4期	「学校における学社融合による体験活動に関する調査」 報告書	平成12年3月16日
第3期	学習機会拡充のための広域連携のあり方について (研究報告)	平成10年1月19日
第2期	学習成果の評価と活用について(研究報告)	平成8年1月10日
第1期	青森県における生涯学習振興のための方策について(答申)	平成5年10月18日

学びと社会参加を通じた人財育成の方策について－「学びの種」を拾う－
(第11期青森県生涯学習審議会報告)

発行年月 平成26年 8 月

発 行 青森県教育庁生涯学習課

〒030-8540 青森市新町二丁目 3 番 1 号

TEL 017-722-1111(内線5195)

FAX 017-734-8272

http://www.pref.aomori.lg.jp/bunka/education/aomorimanabi-e_shogai.html
